

〈女性化〉されたトムとキリスト像

——『アンクル・トムの小屋』について——

中村 絃 一

(1)

アメリカ文学史において、一八五一年はハーマン・メルヴィルの『モービー・ダイク白鯨』が出版されると同時に、ハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』(Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin, or, Life among the Lowly*, 1852)の連載が奴隷制廃止論者の機関紙『ナショナル・レビュー国民時代』に開始された年でもあった。『白鯨』は今日でこそ、例えばモームによる「世界の十大小説」の中に入れられ、その文学的価値はゆるぎのないものとなっているが、出版当時この作品を評価したものはホーソン夫人などごく少数で、一般の人たちは見向きもしなかったようである。

一方、『アンクル・トムの小屋』は雑誌連載中から非常な人気を博し、翌年単行本として出版されるやたちまち三十万部を売り尽くし、英国での出版やその他諸外国での翻訳も入れるとその販売数は二百五十万部に達したという。奴隷制廃止を訴えたこの作品の社会的影響も極めて大きく、南北戦争中にリンカーンはストウ夫人に初

めて会った時、「こちらがこの大きな戦争を起こした作品を書いた小さな「婦人」なのかと挨拶した話は有名である。

(2)

メルヴィルが孤高の魂の作家であるとするならば、ストウ夫人は、主婦・母親・妻を兼ねたごく普通の生活を営む女流作家であった。一八三五年、長老派の青年牧師カルヴィン・ストウは妻に先立たれ、傷心に沈んでいたところを、妻の友人であったハリエット・ビーチャーに慰められ、先妻の死後一年も経たないうちに彼女と再婚したのである。このカルヴィンは子供の頃から幽霊を見、大人になっても他人も自分と同じように幽霊を見ていと信じるほどに精神的に特異な人であった。ハリエットと結婚した頃には、牧師として、また、彼女の父親の神学校の教師として、一応の生計を立ててはいたものの決して裕福で安定した家庭を築くというわけには行かなかった。それに二人の間には、『アングル・トムの小屋』が連載され始めるまでに、すでに双子の娘を初め七人の子供が生まれていた。そのうちの一人はコレラで亡くしてもいた。その間、ハリエット自身も体力的にも精神的にも病んでいて、水療法といった治療を受けに出掛けたことがあった。

そういうわけで、ハリエットの日常は貧乏と多忙を極めていて、書斎に籠もって高遠な思索に耽るというような生活とは全く無縁であった。それに、彼女がそもそも文章を書き始めた動機も、なるほど娘時代から文学に関心を抱いていたとはいえ、直接の理由はその文章を売って少しでも家計の足しにするためであった。こういったことを考慮すれば、『アングル・トムの小屋』に見られるこの作品の判りやすいメロドラマ性、センチメンタリ

ズム、優しさ、それに読者を主として母親を初めとする女性に置いていることといった特徴もやがて納得されて来るのではないか。

(3)

例えば、『アンクル・トム的小屋』のプロットは決して複雑ではない。

まず最初の舞台はケンタッキー州P町のある農園。その農園主のシエルビー氏は借金の返済に困り、妻子ある黒人奴隷アンクル・トムを売却する話に応じる。奴隷商人はトムに加えて黒白混血ミューラの召使いエライザの子供ハリーを要求する。この話を立ち聞きしていたエライザは幼いハリーを連れての逃亡を決意する。目指すはオハイオ川を越えての自由州、さらに、最終の地はカナダである。女手一つで追手を後に従えてのこの北への逃避行は容易なものではない。その最大のサスペンスはエライザがハリーを抱え、足を血だらけにしながらいオハイオ川の流水を跳んで渡るといふ有名なシーンである。このような苦難の後、最後には彼女はめでたく自由を獲得することになる。

一方、アンクル・トムもニュー・オーリンズの奴隷市場へ向けてミシシッピ川を下るといふ南下旅行の途に就く。その蒸気船には、ニュー・オーリンズの大農園主の娘エヴァ・セント・クレアが同乗していたが、彼女は足を滑らせて川中に落ちる。これをアンクル・トムが飛び込んで助けたのがきっかけでトムはこの天使のようなエヴァの召使いになる。しかし、エヴァはやがて結核で死に、続いてセント・クレア氏も事故死ということになって、結局、トムはニュー・オーリンズの奴隷市場に売りに出される。今度は最悪の農園主サイモン・レグリーに

買われたトムは、レッド・リヴァーを遡った農園で虐待されて死ぬ。

このようにして、この物語は、ケンタッキー州を境に、エライザの北進とトムの南下という非常に明快なプロットを持っているが、これについては、エドマンド・ウイルソンは「黒人の人物たち——一方ではアンクル・トムとその家族、もう一方では「エライザの夫」ジョージ・ハリスとエライザ——が一連の放浪に巻き込まれ、そのことがゴーゴリの『死せる魂』中のチチコフの訪問のように、次第にしかもはらはらせながら一つの社会全体の特徴を露にして行く」と述べている。別のアナロジーで言えば、この二組の黒人たちは、『ハックリベリ・フィンの冒険』で筏に乗ったハックとジムと同じような役割をしていて、その筏での旅は南部社会のさまざまな家族を紹介することになったが、『アンクル・トムの小屋』の場合は、これら二組の黒人たちはそれぞれ南部北部のさまざまな社会をも見せることになる。それを「相互関連したエピソードを備えた長い筋にした作者は侮り難い小説家であった」というふうに評価することもできよう。

このようにして、プロットが複雑でないばかりか、登場人物も類型的で単純である。

アンクル・トムやエヴァが善良なキリストチャンであることは誰の目にも明らかである。さらに、トムの最初の所有者シェルビー夫妻も、エヴァの父親セント・クレア氏も一応その仲間に入れることができる。子供のために逃亡を決意するエライザも、そのエライザの逃亡に助力するクエーカー教徒のハリディ夫妻もやはりこの範疇に加えることができよう。

一方、奴隷商人とその仲間や乱暴で残酷な農園主サイモン・レグリーが悪党であることは言うまでもない。

したがって、トムを虐待して殺したサイモン・レグリーが手痛い復讐を受け、エライザを捕らえようとする奴隷商人の手先がこれまた裏をかかれ、ひどい目に遭うというのは、典型的な勧善懲悪のメロドラマで、これを理

解するのなら高等で洗練された特別の教養や感受性を必要としない。ストウ夫人の読者が子供のいる（あるいは、子供を亡くしたことがある）普通の家庭の平凡な主婦であることは極めて当然のことなのである。事実、ストウ夫人は、例えば、エライザが自分の子供に対してこのうえなく母性愛を発揮する場面などでは、「さあ、これを見てください。」と読者である世の母親に呼び掛けてさえもいる。

(4)

もつとも、このような善悪の範疇には必ずしも収まり切らない人物たちがいることも確かである。

エライザの夫で妻子を残して先に逃亡するジョージや、エヴァの母親で、病身で絶えず不平をかこつセント・クレア夫人、セント・クレアのいとこでニュー・イングランドからやってきたオフィリア、それにやんちゃの黒人娘トプシーなどがそうであろう。

とりわけ、有能な黒人奴隷で、発明の才をはじめ、さまざまな点において自分の白人農園主にむしろ優るジョージ・ハリスは、それだけに、従順な黒人奴隷という姿からはほど遠い。しかし、それでいて、彼の言い分にはわれわれの胸を打つものがある。

そのジョージの妻エライザは、夫から逃亡の計画を打ち明けられて、「それは恐ろしいことで、結局のところ、「そんな農園主でも」あなたの主人ではありませんか」とたしなめる。それに対して、ジョージは次のように答える。

「おれの主人だって！ いったい誰が奴をおれの主人にしたのだ？ おれの考えているのはそのことなのだ。——奴は

おれに対してどんな権利を持っているというのだ？

おれも奴と同じ人間だ。おれの方が奴よりも優れている。おれの方が仕事をよく知っているし、よくできる。本もよく読めるし、字もよく書ける。——これは全部独学したのであって、奴のおかげなんかではない。——むしろ、おれは奴の妨害にもかかわらず勉強したのだ。ところが、今、いったいどんな権利があつてこのおれを馬車馬のように働かせようとするのか？ ——おれのできる、それも、奴よりもうまくできることからからおれを引き離し、馬でもやれるような仕事に就かせようとするのか？ 奴はそうしようとしていて、奴の言うところによれば、おれを引きずり下ろし、辱め、わざと最も辛い、卑しい、汚い仕事に就かせるつもりなのだ。」

ジョージのここでの言葉には、われわれの意識からすれば、二重の差別、奴隷の身分に対する差別と黒人に対する差別に敢然と挑戦しようとする姿勢を見ることができるといふ。彼の人権意識は鋭い。

さらに、そのために、彼がいつそうラディカルになることにも注目したい。エライザは「ああ、ジョージ、悪いことはしないでね。神様を信じて、正しいことをしていさえすれば、きっと助けて下さるわ」と諫めるのに對して、ジョージは、「エライザ、おれは君のようなクリスチャンではない。おれの心は憎悪でいっぱい、神を信じることはできないのだ。神はなぜこんなふうにしておくのだ」と反論する。すなわち、彼にとって、キリスト教の神とは、「ソファに腰をかけ、馬車に乗っている人々」のためのものであって、決して黒人奴隷のものではないというのである。彼の目から見れば、そのような神を信じるエライザは何も判っていないというのである。彼はカナダに逃れ、自由の身になってエライザと子供を買い取る計画を実行に移そうとする。捕まるのではないかと心配するエライザに対して、「捕まるものか、エライザ、その前におれは死ぬ！ 自由の身になるか、それとも、死ぬかだ！」とあくまで激しい決意を示す。パトリック・ヘンリーを思わせる権利意識の強いこの言葉

は、神をも否定してやまない彼の心情とともに、今日のわれわれには強く訴えかけるものがある。

(5)

ところが、そんなジョージに較べて、アンクル・トムは、対照的に、「善良なクリスチャン」の黒人奴隸なのである。通常の善悪の観点からすれば、善人であることは間違いないとしても、ジョージの立場から見れば我慢のならない善人ということになる。

物語の主人公トムは、第四章に入ってから初めて紹介される。「われわれの物語の主人公だから、読者のために銀版写真に撮るように正確に述べておかなければならない」と前置きした上で、作者は次のように描く。

彼〔トム〕は、背が高く、厚い胸をし、屈強な男で、つややかな真っ黒い肌をし、その顔は、アフリカ人らしい目鼻立ちに真面目で落ち着いた良識を備えた表情で特徴づけられていた。良識には多くの優しさと慈悲の心が結び付いていた。全体の雰囲気には自尊心と威厳が備わった何かがあったが、そこには、しかし、人を信じる謙虚な素朴さもあった。

もし実際に銀版写真を撮ったとしたらアンクル・トムは体格が立派で汚れをしらぬ黒人として、ほとんど「高貴なる野蛮人」の姿にでも写ったことであろう。しかし、彼は「野蛮人」では決してなく、幸か、不幸か、キリスト教に啓蒙されていたのである。そのために、トムは立派な体格の見掛けにはよらぬへ女々しい姿を見せる羽目に陥ることがしばしばある。

例えば、エライザは、売却の決まった自分の幼子ハリーと逃亡を決心した時、同じ運命にあるトムにも逃亡を

勧める。さらに、トムの妻のアント・クローも「重労働と飢えて殺されてしまうことになる川下へ売られて行くのを待つことはない」とエライザとともにさっさと逃げるよう説得する。それに対して、

トムはゆっくり頭を上げ、悲しげにしかし静かにあたりを見廻し、次のように述べた。

「いや、いや、——自分が行かねえよ。エライザは行くがいい。……もし自分が売られなければ、この農園のみんなとあらゆることが駄目になるといふのなら、自分は売られて行きたい。きつと他の連中と同じように我慢できると思う」と言うのと、嚙り泣きとため息に似たものが彼の広い、毛むくじらの胸を激しくふるわせた。

農園や他の連中のためには進んで自己を犠牲にするという立派な決断ではあるが、それにしては、トムの動作・態度は何と女々しいことか。大きな身体を悲嘆にふるわせる姿には滑稽感さえ覚えてしまいそうなのである。その後自分の子供の寝顔を見たトムの姿についても、作者はさらに次のように続ける。

……彼は、椅子の背によりかかり、大きな両手で顔を覆った。重々しい、しゃがれた大きな声の嚙り泣きが椅子を揺すり、彼の指の間からは沢山の涙が床にこぼれ落ちた。その涙は、男の人なら、長男が横たわっている棺に流す涙であり、女の人なら、死にかけている赤ん坊の泣き声を聞いた時に落とす涙であった。というのも、彼もただの男であり、読者である貴兄もそうである。そして、ご婦人よ、絹と宝石に身をやつしても、あなたもただの女にすぎない。だから、人生の大きな窮境や重い悲しみにあつては、同じ悲嘆を感じるにすぎないのである！」^⑧

ここでは、どうやら作者は、トムにあまりに涙を流させて女々しくさせすぎたと気づいてか、それは男女を問わず人間の情として自然であると一応その弁解をしているのであるが、しかし、逆に言えば、トムはそれほどさように〈女性的〉な性格を与えられていると判断されるのである。

(6)

このように、黒人奴隷トムは大きく立派な身体をしながら女々しい女性的な性格を与えられていて、見方によればかなり滑稽でグロテスクにさえ思われる人物像となっているのであるが、それには何か作者の意図のようなものがあるのであろうか。

そこでまず考えられることは、この〈女々しさ〉と言っても単に泣き虫というだけで決してなく、それは女性的なもの、すなわち、優しさという性格をも意味されているということである。そして、この優しさという性格は、分析すれば、愛を最も大切なものと考え、それゆえ、悪や不法に対しても暴力に訴えるよりは自己犠牲の道を選ぶものと言え、無法な主人に我慢ならず逃亡を企て、追手に捕まりそうになれば、その追手を殺してしまふ雄々しいジョージとは全く対照的に、トムが執る手段は、すでに触れた例でも判るように、常に非暴力と自己犠牲である。奴隷虐待の最もひどいレグリーの農園では、奴隷女キャッチーが、そこでの奴隷たちを虐待から解放するためにトムにレグリー殺害を懸命に依頼するが、トムは断じてそれに応じない。「神は自らの道に倣い、敵を愛する者を救われる」というのがその理由であった。

それゆえ、この言わば〈女性的なトム〉が、一番心を通わせ、最も楽しい時を送ることができたのは、エヴァとともに過ごした日々であったのは、極めて当然のことであったのかもしれない。というのも、今まで述べてきた意味での最も〈女性的なトム〉に対して、最も女性的な女性（あるいは、少女）がエヴァであるからだ。エヴァこそは優しさを絵に描いたような少女であった。

(7)

その優しさに加えて、と言うよりもむしろそこから強く導かれるこの二人の女性的人物に共通するもう一つの注目すべき特徴は、キリスト教に対する絶大な信仰である。エヴァのキリスト教信仰はかなりトムの影響によるものであるが、しかし、そのトムにとってエヴァは最初からただの少女ではなかったようである。まず、作者は、

彼女の姿は完璧なまでに子供らしい美しさを備えていて、子供によくあるような外観のずんぐりしたところも角ばったところもなかった。そこには、何か神話的で寓話的な存在として夢見るようなゆったりとした靈妙な優雅さがあった。⁸⁰

と述べていて、エヴァがとても生身の存在と思われないことを強調する。それゆえ、トムがエヴァを次のように思っても不思議なことではなかった。

彼にとって、彼女はほとんど何か聖なるもののように思われた。彼女の金髪の頭と深い青の瞳が棉の黒っぽい梱の陰から彼の方を覗いたり、荷物の上から見下ろしている時はいつでも、彼は自分の持っている新約聖書から天使がやって来たと半ば信じたのであった。⁸¹

天使像から、やがてキリストのイメージそのものへと変化するのめごく自然であった。

彼女の忠実な従者であるトムの優しく感じやすい心の中で彼女がどんな位置を占めたかを述べるのは難しいかもしれない

い。彼は彼女をなにか壊れやすいもの、この世のもの、として愛したが、しかし、なにか天上的なもの、聖なるもの、としてほとんど崇拜したのである。彼は、イタリアの舟乗りが、——尊敬と優しさの入り混じった気持ちで、幼いイエス像を見つめるように、彼女を見つめたのである。¹⁰

一方、トムについては、彼がエヴァと同じように、キリストであるというふうに文字通り述べられていることではないが、すでに何度も触れたように、彼の受動的な性格、敬虔な心、優しさ、寛大な心、その非暴力主義、自己犠牲といった態度・性格に加えて、彼が物語終末近くでレグリーから迫害され受難の死を迎えるという筋立てを見ると、作者には、トムもまたキリスト像として強く意識されているのは明らかであろう。

ただし、ここで注意すべきは、エヴァ、トムの両者からイメージされるキリスト像とは、何よりもまず優しさを根本にするへ女性的なキリスト像である。どうやら、作者には勇ましく敵しく雄々しいキリスト像は捨象されているようで、反対に、このへ女性的なキリスト像が極めて重要視されていると言えるのである。これはなぜか。

(8)

その前に、この作品に登場する男たちを見てみると、へ女性的なトムは別にして、他の男たちはどうも感心しない。善良なクリスチャンであることになっているシェルビー氏も、農園の負債を返済するためには妻の願いを裏切って結局ハリーを売却する。奴隷売買にあたって人道的な取り扱いを吹聴するヘイリーも実際は非情な奴隷商人にすぎない。エヴァの父親セント・クレア氏はキリスト教信仰に対して優柔不断なところがあってせっかくのエヴァの願いも空しくトムを奴隷の身分から解放する前に事故死してしまう。トムを虐待して殺してしまう

農園主サイモン・レグリーに至っては暴力的で、優しきなど微塵もない最も悪しき意味での「男性的」な人物である。逆に、雄々しく勇敢で過激な、最も良き意味での「男性的」なジョージ・ハリスは神の存在すら否定するほどにキリスト教については批判的であった。このようにして見ると、これらの男たちは、たとい善かれ悪しかれ「男性的」な性格を備えていても、その性格はキリストのイメージにはほど遠いばかりでなく、彼等の信仰もい加減で、場合によっては否定的ですらある。

次に、これらの男たちが奴隷制に関係する時にはどうなるか。ヘイリーやレグリーはその制度の積極的な享受者であってそれを否定することなど思いも及ばない。シェルビー氏とセント・クレア氏は奴隷制そのものについては非人道的であることを承知しながら、自らは奴隷を所有する農園主であるという矛盾を抱えていて、最後のところではその制度に依存しなければ生きていけないのであるから奴隷制廃止ということには無力であるし、たといその悪を口にしても説得力に欠ける。その点、自ら黒人奴隷であるジョージ・ハリスの言動は、確かに人の心を打つものを十分に備えてはいる。しかし、それはまた同時に過激でもある。過激な言動について行ける者は同じく過激な者にすぎず、それは到底社会の多数派を占めることはできない。

(9)

奴隷制の悪を訴えるには、その対象が多数なほどいいことは言うまでもない。そして、社会における多数派ということになれば、女性をおいて他にないであろう、というのがどうやらストウ夫人の眼の付け所ではなかったか。その女性が過激を好まないのは、例えば、シェルビー夫人は北部の奴隷制廃止論者を軽蔑していることでも

判る。多数派である女性の心を動かす最善の方法はその優しさに訴えることであるとストウ夫人は考えたに違いない。

同じことは、女性の信仰についても言えるであろう。すなわち、女性に最も受け入れ易い信仰の対象は過去のピューリタンたちが信じたカルヴィンの「怒れる神」などではなく、もっと優しい〈女性化〉されたキリストのイメージではなかったか。これこそ、母親として子供を育て、さまざまな苦勞をしながらも平凡な人生を送る大多数の女性の最も自然な信仰の形であったと思われる。

ストウ夫人自身、長老派教会の牧師の娘として生まれたにもかかわらず、選ばれた者しか救われないというカルヴィンの厳しい教えに疑問を抱いていた。それは、彼女の長姉の婚約者が悔い改めをしないで死に、また、彼女自身の息子が改心しない状態で溺死したが、いずれの場合でも自分にとって最愛の者がそのために地獄に墮ちるといふことには耐えられないという辛く悲しい経験を味わったせいである。したがって、その観点から、彼女自身生身の人間として、また作家として、その生涯を振り返ってみると、「ストウ夫人はカルヴィニズムを駆逐し、イエスの教えをドラマ化したのであった」というふうに行くこともできるのかもしれない。もちろん、ここでのイエスの教えというのは、人間存在の悲嘆を知り、その結果、優しさを説かずにおれない教えであり、それは、つまるところ、〈女性化〉されたキリスト像に象徴されるものであった。

したがって、この点から見ると、『アンクル・トムの小屋』という作品で、〈女性化〉されたトムが〈女性化〉されたキリスト像としてイメージされていることは、実に効果的であったと言えよう。

(10)

どうやら、ストウ夫人の戦略はここにあったのではないか。アメリカ社会の何と云っても多数派であるところの女性に対して、奴隷制の悪を訴えるのに、自分が奴隷制廃止論者ふうに過激になってもおそらく反発を招くだけであろう。虐げられた奴隷自身の身になってその悪を訴えれば説得力を持つてであろうが、しかし、それがジョージのような訴え方ではやはり過激に過ぎるのである。肉体的には屈強でありながら、その心は(女性性的)な、そして、その信仰の篤さから限りなくキリストのイメージに近い奴隷が受難を経験する時ほどに効果的にしかも多くの女性の心を揺さぶることはない、とストウ夫人は考えたのではあるまいか。考えた、と言えばあまりにも戦略的に過ぎるとするなら、自ら日常的な主婦・母親という生活を経験していた彼女がごく自然に悟ったことなのかもしれない。あるいは、ことによると、もはや伝説化されているように、そのようなトムの死の場面を神からの啓示として受け取ったというふうに言えるのかもしれない。

もちろん、そのような方法が読者である女性のセンチメンタルな感性に訴えていることには間違いない。センチメンタリズムは安っぽく、高等ではない。トム自身のイメージが泣き虫で読んで時には滑稽でうんざりするところがあるのは再三指摘した通りである。しかし、そのような欠点があるにもかかわらず、あるいは、そのような欠点(？)がゆえに、この作品は当時未曾有というべき多数の人々に読まれたのである。今世紀に入って、自ら黒人であるリチャード・ライトが行なったこのようなトム像に対する批判のみならず、当時においてすら、例えば南部のチェスナット夫人のようにこの作品の感傷的な欠点を指摘した人がいた。しかし、それらの批判や

指摘も全てこの作品が読まれてこそ、もっとよく言えば、この作品に心を動かされてこそ行われたものではあるまいか。皮肉な見方をすれば、ストウ夫人はメルヴィルのような孤高の作家ではなく、ありふれた主婦・母親作家であったからこそ、奴隷制の悪をあれほど多くの人々に訴えることができたと言えるのである。しかも、多くの犠牲が払われたとはいえ、まもなく奴隷制は廃止されたのである。(筆者は、この小論の要旨を一九八七年十二月四日立命館大学で行なわれたアメリカ文学会関西支部大会のフォーラム「フェミニズム批評に向けて」において発表した。その際、文学におけるセンチメンタリズムの効用についての質問があったが、この問題については小田実「アリステレスとロンギネス——『文強』の修辭学」(岩波講座『文学9』、一九七六)やLeslie Fiedler, *What Was Literature?* (1982)に詳しい。)

だが、ストウ夫人にとってさらに大切なことは、『アングル・トムの小屋』は奴隷制糾弾の書だけでは決まらなかったことである。彼女にとって、それは信仰の書でもあった。もちろん、彼女はこの作品の中でもキリスト教の批判らしきものを行なっている。例えば、ジョージが口にする神の存在の否定がそうであったし、シエルビー夫人は南部の聖職者たちが奴隷制を神の肯定したものとして是認するのを非難した。しかし、すでに明らかのように、それらの批判や非難はトムやエヴァが口にし、身をもって示す圧倒的なイエスの教えに較べると影は薄い、と言うよりも、むしろ、その輝きを大きくしているのである。

トムはあれほど虐げられ苦しみながら、不思議なことには奴隷制を批判するようなことは決してない。自分の不遇を泣いて大いに悲しむが、だからといって苛酷な主人を恨むでなく、代わりに許してしまう。したがって、そのようなトムが「敵を愛せよ」と口にするのを読むと、読者は、ストウ夫人には奴隷制の悪よりもキリストの教えの方に実は関心がある、あるいは、黒人奴隷制を題材にして信仰の問題を扱っているのではないかと時には思われてくる。トムが限りなくキリスト像に近いことはすでに詳しく見てきたが、ストウ夫人はこのようなトム

を通して、カルヴィンの「怒れる神」ではなく優しいイエスの教えを十九世紀アメリカ社会の多数派、すなわち女性に向かって説いたのである。これは、長老派の牧師の娘として生まれ、長老派の聖職者の妻として生活をしたことと共感と反発を抱いたやや特異な境遇からの帰結であったかもしれない。しかし、それ以上に、平凡な主婦・母親として人並みの苦難を数々経験した女性がごく自然に傾いた信仰の告白であったように思われる。⁶⁾

註

- ① Edmund Wilson, *Patriotic Gore, Studies in the Literature of the American Civil War*, (Farrar, Straus and Giroux, 1962), p. 10.
- ② *Ibid.*, pp. 10-11.
- ③ Cf. Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin, or, Life among the Lowly* (Penguin Books, 1981), p. 105.
- ④ *Ibid.*, p. 60.
- ⑤ *Ibid.*, p. 62.
- ⑥ *Ibid.*, p. 64.
- ⑦ *Ibid.*, p. 68.
- ⑧ *Ibid.*, p. 90.
- ⑨ *Ibid.*, pp. 90-91.
- ⑩ *Ibid.*, p. 230.
- ⑪ *Ibid.*, p. 231.
- ⑫ *Ibid.*, p. 79.
- ⑬ Wilson, *Op. Cit.*, p. 58.
- ⑭ 作品最後に近い所では、一種の幽霊(ゴシック)物語が導入されているが、これもやはり多くの読者の興味を引こうとする作者の意図の表れと解することができる。

⑮ 例えば、小説の美学にあればどうなるか。ヘンリー・ジェイムズでさえ、子供の頃にこの作品から大きな感動を受けた思い出を持っていて、美学上の問題とは別に、素直にその作者に敬意を払わざるをえなかったようである。 Cf. Wilson, *Op. Cit.*, p. 11.

⑯ これは十九世紀アメリカ社会の福音主義的傾向と大いに関係する。この点については、エリザベス・アモンスは歴史家バーバラ・ウエルターからの引用をしながら次のように説明している。「アメリカが農本社会から工業社会に、植民地の地位から独立国家の地位に変化していくにつれて、かつては主たる政治的道具であり、したがって力のある男性によって注意深く管理されていたキリスト教は、男性の領域から抜け出て女性の管理の下に入った。その結果、『それは変化の過程を経たわけで、それによって、より家庭的な、より感情的な、より優しく受け入れやすいもの、——つまり、より女性的な』ものになって行った。」 Cf. Elizabeth Ammons, "Stowe's Dream of the Mother-Savior: *Uncle Tom's Cabin* and American Women Writers Before 1920s," in *New Essays on "Uncle Tom's Cabin,"* (ed.) Eric J. Sundquist, (Cambridge University Press, 1986), p. 162. なお、拙論はこの論文に負うところが多い。